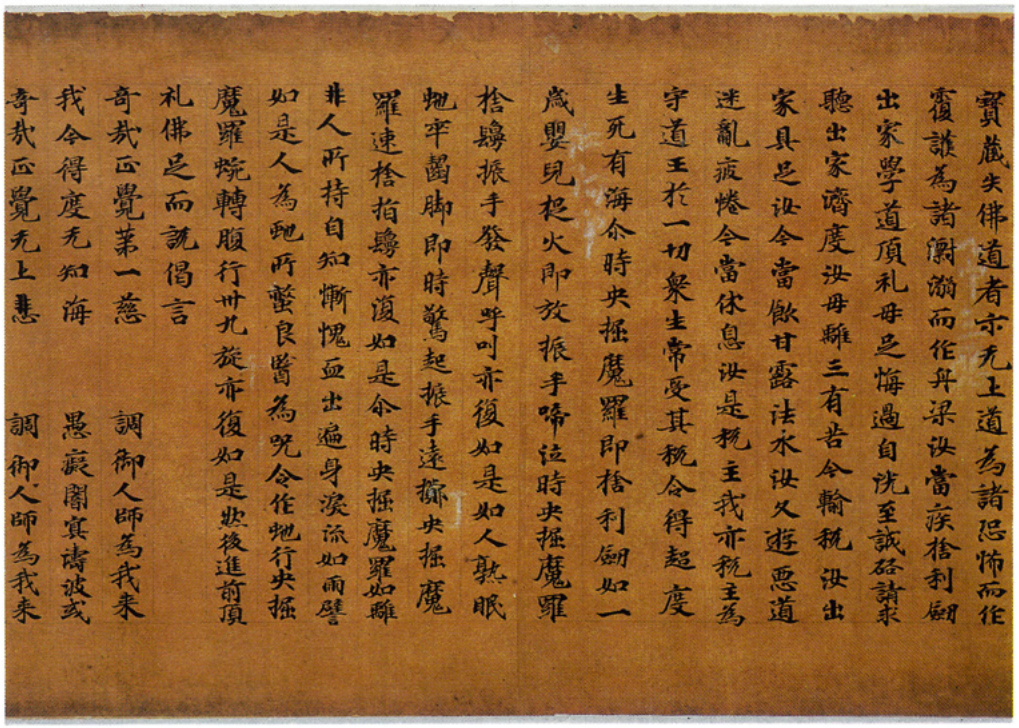
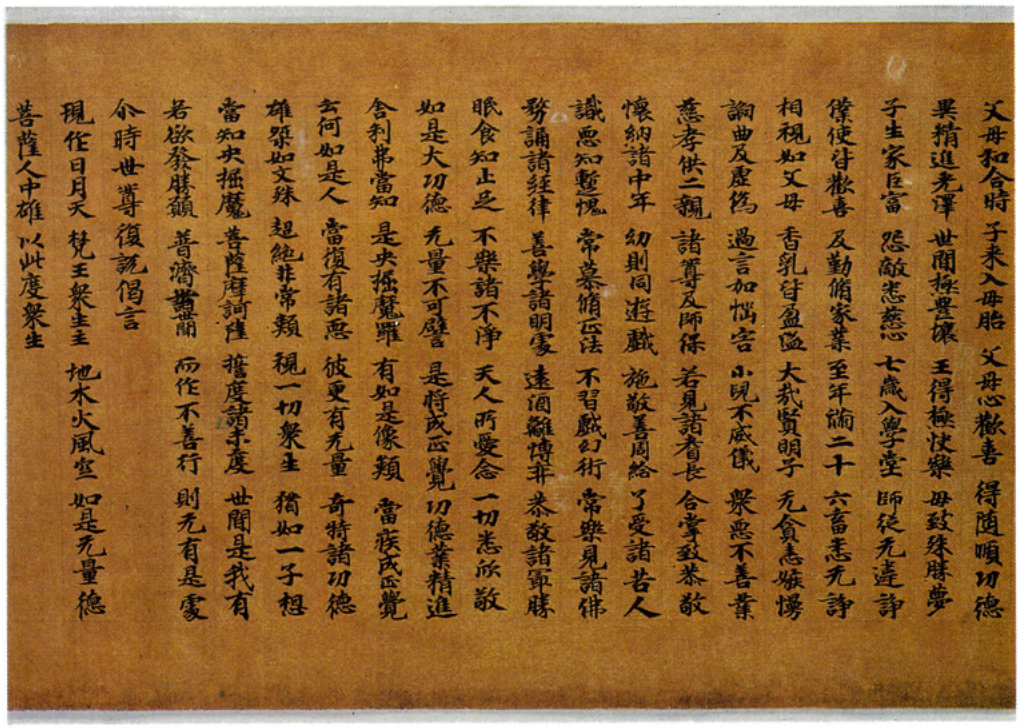


寶藏失佛道者示无上道為諸怨怖而作
覆護為諸衆溺而作舟梁汝當疾捨利劒
出家學道頂礼母足悔過自洗至誠啓請求
聽出家濟度汝母雖三有苦今輸稅汝出
家具足汝今當飲甘露法水汝久遊惡道
迷亂疲惓今當休息汝是稅主我亦稅主為
守道王於一切衆生常受其稅令得超度
生死有海尒時央掘魔羅即捨利劒如一
歲嬰兒起火即放振手啼泣時央掘魔羅
捨鞭振手發聲呼叫亦復如是如人熟眠
地卒齧脚即時驚起振手遠擲央掘魔
羅速捨指鞭亦復如是尒時央掘魔羅如雖
非人所持自知慚愧血出遍身淚流如雨譬
如是人為毒所螫良醫為呪令作地行央掘
魔羅蜿轉腹行廿九旋亦復如是於後進前頂
礼佛足而說偈言

奇哉正覺第一慈　調御人師為我来
我今得度无知海　愚癡闇冥濤波或
奇哉正覺无上悲　調御人師為我来

1　央掘魔羅経巻一　第17紙(第４類神護景雲二年御願経第72号)



父母和合時子来入母胎　父母忍歡喜　得隨順功德
異精進光澤　世間極豐壤　王得極快樂　母致殊勝夢
子生家巨富　怨敵悉慈愍　七歲入學堂　師徒无違諍
僮使皆歡喜　及勤循家業　至年滿二十　六畜悉无諍
相視如父母　香乳甘盈盈　大哉賢明子　无貪恚嫉慢
諂曲及虛偽　過言加惱害　小兒不底儀　衆惡不善業
慈孝供二親　諸尊及師保　若見諸耆長　合掌致恭敬
懷納諸中年　幼則同遊戲　施敬善周給　了愛諸苦人
識惡知慙愧　常慕循正法　不習戲幻術　常樂見諸佛
勞誦諸經律　善覺諸明處　遠離諸博弈　恭敬諸尊勝
眠食知止足　不樂諸不淨　天人所愛念　一切悉欣敬
如是大功德　无量不可譬　是將氏正覺　功德業精進
舍利弗當知　是央掘魔羅　有如是像類　當疾氏正覺
云何如是人　當復有諸惡　彼更有无量　奇特諸功德
雄猛如文殊　超絶非常類　視一切衆生　猶如一子想
當知央掘魔　菩薩摩訶薩　捨度諸手度　世間是我有
若欲發勝願　普濟衆闇　而作不善行　則无有是處
尒時世尊復說偈言
現作日月天　梵王衆主主　地水火風空　如是无量德
菩薩人中雄　以此度衆生

2　央掘魔羅経巻二　第17紙(第４類神護景雲二年御願経第72号)

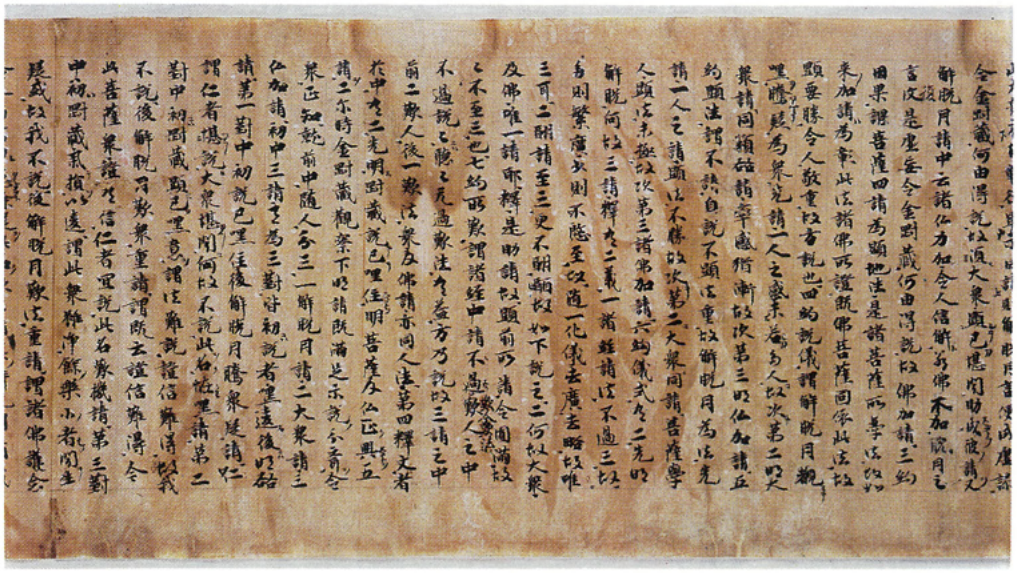
1　央掘魔羅経巻第一　（第四類神護景雲二年御願経第七二号）

白書の訓点は平安極初期のもので、字音直読の注である。「瀰溺」に対して「へ宇二悪」（ヘウミアク）、「嬰」に対して「伍（？）阿宇」（イアウ）、「擲」に対して「丁」、「旋」に対して「千」のやうな注記が見られる。「溺」の注「ミアク」は「ニアク」の音転と見られ、「イアウ」と共に拗音表記の古例として注目される。

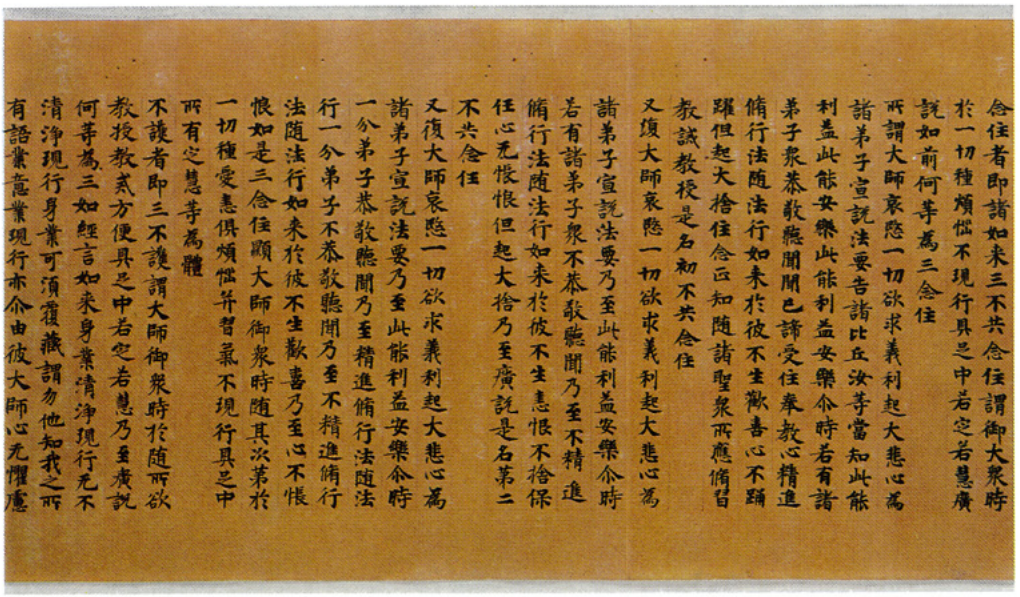
2　央掘魔羅経巻第二　（第四類神護景雲二年御願経第七二号）

「壌」に対して「仁阿宇」（ニアウ）、「術」に対して「頁矢」（ズチ）、「務」に対して「ム」、「奕」に対して「也久」（ヤク）、「桀」に対して「千悪」（チアク）などの字音注の例が見える。「術」を「スチ」とよんだ例については、春日政治博士がこれを取上げて、枕草子などに見える「すちなし」の語義が「筋無し」ではなくて「術無し」であることを論証された。

（築島　裕）



3　華厳経探玄記巻九　第26紙(第５類甲種写経第33号)



念住者即諸如来三不共念住謂御大衆時
於一切種煩惱不現行具足中若定若慧廣
說如前何等為三念住
所謂大師哀愍一切欲求義利起大悲心為
諸弟子宣說法要吉諸比丘汝等當知此能
利益此能安樂此能利益安樂尒時若有諸
弟子衆恭敬聽聞聞已諦受住奉教心精進
脩行法隨法行如来於彼不生歡喜心不踊
躍但起大捨住念正知隨諸聖衆所應脩習
教誡教授是名初不共念住
又復大師哀愍一切欲求義利起大悲心為
諸弟子宣說法要乃至此能利益安樂尒時
若有諸弟子衆不恭敬聽聞乃至不精進
脩行法隨法行如来於彼不生恚恨不捨保
任心无恨恨但起大捨乃至廣說是名第二
不共念住
又復大師哀愍一切欲求義利起大悲心為
諸弟子宣說法要乃至此能利益安樂尒時
一分弟子恭敬聽聞乃至精進脩行法隨法
行一分弟子不恭敬聽聞乃至不精進脩行
法隨法行如来於彼不生歡喜乃至心不恨
恨如是三念住顯大師御衆時隨其次第於
一切種愛恚俱煩惱并習氣不現行具足中
所有定慧等為體
不護者即三不護謂大師御衆時於隨所欲
教授教誡方便具足中若定若慧乃至廣說
何等為三如經言如来身業清淨現行无不
清淨現行身業可須覆藏謂勿他知我之所
有語業意業現行亦尒由彼大師心无懼慮

4　大乗阿毗達磨雑集論巻十四　第７紙(第２類唐経第９号)

3　華厳経探玄記巻第九　（第五類甲種写経第二三号）

全巻に白書の訓点が施されている。平安初期（九世紀）の後半期の加点で、ヲコト点は第三群点の変形（星点が左上隅から右廻りにテニハヲノキトとなる）である。中央下欄外に白書で「歎人　歎法」の書入れがあり、その二行前の本文「酬」に対して「コタ(フ)ルこと」、その右方「啓請」に対して「ケイ(シヤウ)すること」、「率」に対して「ニハカに」の白点がある。墨仮名は応永十四年の加筆である。

4　大乗阿毗達磨雑集論巻第十四　（第二類唐経第九号）

平安初期（九世紀）初頭と認められる白書の訓点が全巻に施されている。ヲコト点は第二群点（星点が左下隅から右廻りにヲニハテとなるもの）に属するが、線点・鉤点は十分に発達していない。「恚恨」に対して「伊可利有良未」（イカリウラミ）、「悵悢」に対して「伊多未可奈之布、下音良有」（イタミカナシブ、下音ラウ）等の白書の和訓や字音注の例が見られる。

（小林芳規）

（写真撮影　1～4　山中五郎）